様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１０２３

研究課題名（和文）近世フランスの軍隊社会に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research on the French Military in the Early Modern Period

研究代表者
芹生　尚子（Seriu, Naoko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：７０７８３７０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀後半とりわけフランスの軍事的ヘゲモニーの失墜をあらわにした七年戦争（1756-1763）に続く時代には、軍隊の王権主導の改革が展開した。改革に賛同する将校たちは、兵士について多くを語り提言を行なっている。本研究は、改革者の言葉のなかで、兵士のアイデンティティの構成要素となるような価値観や経験の枠組みがどのように創造されていったかその一端を明らかにする。また、彼らが構想する新たな統治術が兵士の身体や感情のありかたを変容させる射程をもっていたことを明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義
フランスの近世の軍隊については日本の西洋史研究において豊かな研究が蓄積されてきたが、アンシアン・レジーム期最後の四半世紀の改革期の軍隊については従来あまり注目されなかった。同時期には、近代的な軍隊の基礎となるような改革が実施されているが、それらの動向に光をあてるとともに、絶対王政期の統治構造やその変化についても理解を新たにした。

研究成果の概要（英文）：In the second half of the 18th century, especially after the French defeat in the Seven Years' War, the absolute monarchy undertook the reorganization and reformation of the army with the collaboration of its officers. The aim of this project is to show how the new definition of the soldier emerged in the discourse of military elites. By analyzing their arguments on desertion, discipline and exercise, we will also highlight a new form of power that sought to influence the bodies and minds of soldiers.

研究分野：近世フランス史

キーワード：アンシアン・レジーム　啓蒙　改革　将校　兵士　絶対王政　軍隊　身分・アイデンティティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近世フランスの軍隊を構成した兵士については、一連の豊かな研究が蓄積されてきた。「系の歴史学」の影響のもと、兵役簿に依拠しながら無数無名の兵士に光をあてたアンドレ・コルヴィジエ、都市パリで軍務につく兵士に関心を寄せたジャン・シャニオ、「廃兵」に焦点をあてたジャン・ピエール・ボアらの業績は、軍隊という制度が、同時代の社会と緊密な関係を保ちつつもまた同時にそれ自体が一つの社会として機能するさまを明らかにしてきた。それらの研究では、軍隊が社会階層の観点から詳細に論じられ、身分社会に生きた広汎な人々にとって兵士という職業が身近なものであったことが提示されていた。アンシアン・レジーム期の民衆の日常生活や行動様式に関心をもっていた研究代表者は、民衆の経験の場としての軍隊に注目し、兵士の日常生活を律する規範の体系が 18 世紀を通じて徐々に形成されていく過程を明らかすることを試みていた。しかし、それらのテクストが、いかなる意味で、個々人の身体や感情に働きかけ兵士のアイデンティティを形成しえたのかについては十分に考察できていなかった。アンシアン・レジーム期における国王の法はシステマティックな適用に及ばないことが指摘されているが、そうした状況が、18 世紀後半の改革期の軍隊において変容したか否かを検討する余地が十分にあった。同時期に行われた軍隊の改革については、近年の研究では、啓蒙的な側面が強調されているが、統治構造の変化の観点から考察することも重要であると思われた。

２．研究の目的

本研究は、七年戦争後の改革期の軍隊で改革を支持した将校の言説のなかに示される兵士像や価値観を明らかにするとともに、それが個々の兵士にどのような影響を持ちえたのかを考察する。また、兵士の統制という観点からアンシアン・レジーム末期において軍隊を対象に行われた改革の特質を把握する。同時期にさまざまな領域で進められた王権主導の改革は、しばしば特権をもつ「エリート」の反対のために挫折したことが知られている。本研究では、軍事エリートである将校の意見や立ち位置に光をあてることで、軍隊の改革に固有の方向性を見定める。

近年軍事に関する歴史学のまなざしは歴史学とともに多様化している。本研究は、そうした史学史の全体的な動きに注目しながら研究者の交流を促すためのネットワーク形成へ貢献することも目的としている。

３．研究の方法

本研究は、18 世紀後半、とくに七年戦争後の改革の流れの中で書かれた将校のメモワールや軍事に関する出版物を取り上げ、改革に協力しようとする軍事エリートが、民衆出身の兵士を語るそのしかたを主に次の点において明らかにする。

1）アンシアン・レジーム最後の四半世紀にあたる同改革期には、近世の軍隊では恒常的に起こった脱走が事案化され、脱走兵に対する刑罰を改革することの必要性が強調された。周知のように、ベッカリアらの提唱する刑罰の改革は、同時代の「公共圏」において広く論じられていたが、脱走に関する将校の議論はそれらの潮流とどのように接合しえたのだろうか？両者の間に、どのような類似性や相違点があるのだろうか？兵士を対象とする刑罰が将校たちによって議論されるなかで兵士はどのような存在として理解されたのだろうか？以上のような問いを手がかりに、1760 年代後半と 1770 年代前半に展開した脱走兵に関する将校の死刑廃止論を分析しその意義を再考する。

2）フランス軍の訓練の不足が露呈された七年戦争の終結に続く時代には、訓練や規律が議論の焦点となった。同時期の将校たちは、兵士の身体や外見に多大な関心を寄せ、新兵の立ち方や歩き方そして軍服の着こなしや身繕いを極めて詳細に論じている。それらの言葉には、どのような期待や願望が示されているのだろうか？兵士と農民を身体において差異化しようとする将校たちの言葉に注目しながら、改革期の軍隊における兵士の身体の位置づけについて考察する。

主な史料として、フランスの国防省の文書館の GR 1M 系列に所蔵されている将校のメモワールを用いる。その際、メモワールとともに保存されている送付状、さらに将校の年金申請ファイルを併せて参照する。それによって、メモワールという史料に貫かれる王権と将校の力関係を明らかにした上で、改革の言説を分析する。さらに、兵士を語る将校の言葉と当事者である兵士の観点の交差あるいは乖離を検討するために、モゼール県文書館の B 系列に所蔵されているマレショセ文書をはじめとする司法・警察文書を補助的に参照した。

４．研究成果

改革期に将校が陸軍卿にあてたメモワールでは、兵士について多くのことが語られているが、それは王権と将校の新たな関係のなかで形成されていたことが明らかになった。将校は兵士を知るエキスパートとして自らを位置づけながら改革に貢献しようとしており、メモワールの文言が、書き手の抱く「表象」や「理念」の次元にとどまらず、兵士の身体や感情に働きかける射程をもちえたことが垣間見れた。

脱走を論じたメモワールからは、1775 年の平時における脱走兵への死刑廃止に先行する約 10 年の期間において、将校たちがほぼ全会一致で廃止論を唱えていたことが看取された。同時代の刑法学者やフィロゾーフによって提唱されていた刑罰の改革が、脱走という犯罪に関して実現をみたことは、すでに指摘されているように、改革期の軍隊の先駆性や啓蒙的な側面を物語る。他方で、刑法改革者とともに犯罪者の感受性に働きかける効果的な刑罰を模索していた将校たちが、脱走の原因や死刑の抑止力の欠如をフランス人固有の「軽率さ」や死を恐れない兵士というステレオタイプを用いて説明していたことが確認できた。脱走という犯罪に関する議論は、兵士とは何かという議論と緊密に結びついていた。かくして、改革期の軍隊の中で、死より恥辱を恐れる兵士、名誉心をもつ兵士といった新たな兵士像が繰り返し語られ、議論の前提となるべき「事実」として共有されていくことになった。

訓練や規律を論じたメモワールからは、戦術上の必要もさることながら、兵士と農民の身体とを区別し、身分の観点から民衆の上位者として兵士を位置づけることが重視されていた。身分社会のなかで「卑しい」存在として蔑まれていた民衆は兵士になることで身分の上昇を果たすことができるとされたが、結果的に厳格な軍隊の階層秩序のなかに組み込まれることになった。

軍事史という領域は長らく軍事を専門とする歴史家によって研究されてきたが、近年、軍事に関する歴史学のまなざしは多様化し、多様な問題関心からアプローチすることが可能になってきた。このような展望のもと、啓蒙と軍事の関係について著作を出版した歴史家クリスティ・ピキーケロ氏を招聘し講演をいただく機会をえた。ジェンダーと感情史の交差する地点で革命期の軍隊を研究されているジェニファー・ホイヤー氏の招聘は新型コロナウイルス感染症の世界的流行のために中止となりその後研究期間内において実現することができなかった。また、研究分担者である高澤氏が中心となり佐々木真氏とともに進められていたフランス社会科学高等研究院（パリ）でのシンポジウムも同様の理由から中止になった。しかし、ネットワークの形成の観点から成果があった。そのような成果に依拠しながら、女性兵士に関する論考で知られるジェンダー史家シルヴィ・スタインベルグ氏（フランス社会科学高等研究院）を日本に招聘し講演いただくことができた。

本研究では、将校の観点また脱走という「犯罪」を通して見た軍隊については一定の成果を上げることができたと思われるが、兵士の観点については必ずしも十分に掘り下げることができなかった。様々な史料を確認することができたが、それらの痕跡に何を語らせうるか考察を進めながら今後探求することが重要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 芹生尚子	４．巻 173
２．論文標題 ルイ・セバスチャン・メルシエ「戦争について－夢－」翻訳・解題(２)	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ふらんぼー = Flambeau	６．最初と最後の頁 173-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高澤紀恵	４．巻 35
２．論文標題 教科「世界史」誕生を歴史する--ルアナ・ボールズの軌跡	５．発行年 2023年
３．雑誌名 世界史の眼	６．最初と最後の頁 0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 芹生尚子	４．巻 36
２．論文標題 啓蒙の世紀における軍隊の影で ： 平和と改革の時代にフランス軍を脱走した兵士たちの記録が問いかけるもの	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日仏歴史学会会報	６．最初と最後の頁 84-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32200/bsfjsh.36.0_84	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高澤紀恵	４．巻 96
２．論文標題 戦後・教科『世界史』・西洋史学	５．発行年 2021年
３．雑誌名 法政史学	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 芹生尚子	４．巻 2022春
２．論文標題 「生きた人間たち」を捉える眼	５．発行年 2022年
３．雑誌名 ピエリア	６．最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 芹生尚子	４．巻 46
２．論文標題 ルイ・セバスチャン・メルシエ「戦争について－夢－」翻訳・解題（1）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ふらんぼー = Flambeau	６．最初と最後の頁 197-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Seriu Naoko and Rin Odawara	４．巻 23
２．論文標題 War, Violence and Gender in a Global Perspective: Memories and Representations in the Cases of the Algerian War, South Korean ‘Comfort Women’ and the Bosnian ‘Mothers of Srebrenica	５．発行年 2021年
３．雑誌名 クァドランテ	６．最初と最後の頁 73-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高澤紀恵	４．巻 １１６３
２．論文標題 特集「ナショナル・ヒストリー再考にあたって	５．発行年 2021年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 12-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 芹生尚子	4．巻 5
2．論文標題 18 世紀後半フランスにおける脱走兵の処罰をめぐる論争と改革－感情と法，そして統治技法との絡み合い－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 エモーション・スタディーズ	6．最初と最後の頁 64-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20797/ems.5.1_64	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 芹生尚子（共著者：小田原 琳）	4．巻 ２１
2．論文標題 「統治の実践と植民地－フランス領フランス島（現モーリシャス島）とイタリア領アビシニア（現エチオピア）の事例を通じて」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『クァドランテ』	6．最初と最後の頁 139-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計19件（うち招待講演　5件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 芹生尚子
2．発表標題 シルヴィ・スタインベルグ氏を迎えて
3．学会等名 シルヴィ・スタインベルグ講演「武器を手にした女たち」（日仏会館、2024年2月13日）
4．発表年 2024年

1．発表者名 高澤紀恵
2．発表標題 シルヴィ・スタインベルグ氏へのコメント
3．学会等名 シルヴィ・スタインベルグ講演「武器を手にした女たち」（日仏会館、2024年2月13日）
4．発表年 2024年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 コメント「「もの」からみた都市空間」
３．学会等名 歴史学研究会 2023年度大会（2023年5月28日）（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 難波村プロジェクトの理解のために 近世フランス史からの問い
３．学会等名 「総括円座 近世巨大都市・三都の複合的社会構造とその世界史的位置」（2023年8月27日、大阪公立大学）（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 編者からのリプライ
３．学会等名 合評会『「身分」を交差させる：日本とフランスの近世』（於法政大学、1月20 日）
４．発表年 2024年

１．発表者名 芹生尚子
２．発表標題 執筆者からのリプライ
３．学会等名 合評会『「身分」を交差させる：日本とフランスの近世』（於法政大学、2024年1月20 日）
４．発表年 2024年

１．発表者名 芹生尚子
２．発表標題 後悔させたい男たち －アンシアン・レジーム末期の改革期の軍隊において展開した 脱走兵に対する自主帰還奨励策に関する一考察－
３．学会等名 フランス絶対主義研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 『フランス絶対主義 歴史と史学史』ーー小山哲報告へのリプライ
３．学会等名 関西フランス史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 『近代パリの社会と政治ーー都市の日常を探る』--近世史からの問いかけ
３．学会等名 フランス革命史研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 「ここ」と世界ーー西洋史学の場所
３．学会等名 日本西洋史学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 戦後・教科「世界史」・西洋史学
３．学会等名 法政史学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 芹生尚子
２．発表標題 啓蒙の世紀における軍隊の影で－平和と改革の時代にフランス軍を脱走した兵士たちの記録が問いかけるもの－
３．学会等名 日仏歴史学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 向こう岸のジャコバンへのコメント
３．学会等名 日本西洋史学会（静岡大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 ヴォーリズとICU－－一九五〇年代の挑戦
３．学会等名 第一三回ヴォーリズ建築文化全国 ネットワークin Tokyo（国際基督教大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 「討論：諸国民の世界史のために」
３．学会等名 フランス国立日本研究所・日仏会館共催シンポジウム（日仏会館）
４．発表年 2020年

１．発表者名 高澤紀恵
２．発表標題 「京都・社会史・アソシエーションーー「近社研」の挑戦」
３．学会等名 京都大学大学院文学研究科西洋史学専修主催合評会：『社会史とは何であったか』
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoko Seriu
２．発表標題 The difficult memory of a lost battle of the Second World War: testimonies, literature and history about the Japanese defeat of Leyte
３．学会等名 国際会議,The Battlefield after the Battle, Memories and Uses, リール大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Naoko Seriu
２．発表標題 War, Gender and Law in the 18th Century French Literature
３．学会等名 国際ワークショップ,War, Violence and Gender in Global Perspective グローバルな視座から考える戦争・暴力・ジェンダー,東京外国語大学（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Norie Takazawa
２．発表標題 趣旨報告
３．学会等名 シンポジウム　"ここ"の歴史へ　ー幻のジェットエンジン、語るー,2018年6月2日,国際基督教大学
４．発表年 2018年

〔図書〕　計10件

１．著者名 Naoko Seriu	４．発行年 2023年
２．出版社 Les Presses Universitaires du Septentrion	５．総ページ数 394
３．書名 "Invitation au voyage sur les champs de bataille perdus de la Seconde Guerre mondiale”, Catherine Denys, Gilles Malandain, et Benjamin Deruelle (dir.), Apres la bataille : Memoire et usages des champs de bataille, du XVIe siecle a nos jours, pp.335-354.	

１．著者名 高澤　紀恵、ギヨーム・カレ	４．発行年 2023年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 400
３．書名 「身分」を交差させる	

１．著者名 芹生尚子	４．発行年 2023年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 400
３．書名 啓蒙の世紀と軍事改革ーー想像/創造された兵士たち ： 高澤紀恵・ギヨーム・カレ編、『「身分」を交差させる』東京大学出版会、pp. 327-348.	

1．著者名 高澤紀恵	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 203
3．書名 「名乗ること」と「「名指すこと」ーーフランス近世史から:中澤達哉編『王のいる共和政--ジャコバン再考』pp.171-183.	

1．著者名 芹生尚子	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 331
3．書名 （共訳）F・コザンデ、R・デシモン（フランス絶対主義研究会訳=小山啓子、佐々木真、芹生尚子、高澤紀恵、竹下和亮、林田伸一、正本忍、松本礼子、森村敏己　訳)『フランス絶対主義ーー歴史と史学史』pp.157-179.	

1．著者名 高澤紀恵	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 331
3．書名 訳者改題 ：F・コザンデ、R・デシモン『フランス絶対主義ーー歴史と史学史』pp.251-264.	

1．著者名 高澤紀恵	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 331
3．書名 (訳者コラム）absoluをめぐって ：F・コザンデ、R・デシモン『フランス絶対主義ー歴史と史学史』pp.10-11.	

１．著者名 芹生尚子	４．発行年 2021年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 331
３．書名 (訳者コラム) Parlement 高等法院（パルルマン）：F・コザンデ、R・デシモン『フランス絶対主義ー歴史と史学史』pp.154-155.	

１．著者名 Naoko Seriu	４．発行年 2020年
２．出版社 CHJ Editeur	５．総ページ数 331
３．書名 Du manque a l’exces, in Luisa Brunori, Farid Lekeal, Alain Wijffels (eds), Gouvernance, justice et sante, pp.135 -144.	

１．著者名 高澤紀恵、山﨑鯛介	４．発行年 2018年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 316
３．書名 建築家ヴォーリズの夢	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高澤　紀恵 (Takazawa Norie) (80187947)	法政大学・文学部・教授 (32675)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 Lecture by Christy Pichichero, "The Military Enlightenment: Mentalities and Legacies in France and Beyond"(Institute for Global Area Studies, Tokyo University of Foreign Studies(May 16)	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 シルヴィ・スタインベルグ講演「武器を手にした女たち」（日仏会館、2024年2月13日）	開催年 2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関